

姫路城城下町跡

—姫路城跡第431次発掘調査報告書—

2021

姫路市教育委員会

序

姫路市の中心部に位置する姫路城は、関ヶ原合戦の功により播磨 52 万石の大名になった池田輝政が慶長 6 年（1601）から同 14 年にかけて築城した平山城で、白鷺城とも呼ばれています。標高 45.5m の姫山に配置された本丸を中心に、周辺の武家屋敷や町屋などを含めて城下町全体が内堀・中堀・外堀の三重の堀で囲まれていました。このたび、発掘調査を行った五軒邸周辺は、外堀と中堀の間に挟まれた外曲輪の北東部に位置し、武家屋敷地として利用されていました。

姫路市の中心部は昭和 20 年（1945）の米軍による空襲により壊滅し、戦後復興のための土地区画整理等に伴い市街地も拡大してきました。近年、発掘調査の進展により城下町の遺構が地中に良好な状態で残存していることが明らかになりつつあります。今回の調査では江戸時代のほか弥生時代の遺構及び遺物が見つかりました。これらは地域の成り立ちや歴史的な変遷を解明する上で貴重な資料となります。ここにその成果を報告し、今後の調査・研究の進展に資するものです。

末尾になりましたが、発掘調査の実施にあたり多大なご協力を賜りました事業者をはじめ関係の皆様に心より御礼申し上げます。

令和 3 年（2021 年）3 月

姫路市教育委員会

教育長 松田 克彦

例言・凡例

1. 本書は、兵庫県姫路市五軒邸四丁目 120 番・121 番において実施した姫路城城下町跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、事業者から委託を受け姫路市教育委員会が実施した。調査及び本書の執筆・編集は姫路市埋蔵文化財センターの南憲和が担当した。
3. 発掘調査に關する写真・図面等の記録及び出土品は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
4. 本書で使用した座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標系 V 系であり、方位は座標北を示す。標高値は、東京湾平均海水準 (T.P.) を基準とした。
5. 遺構記号は、文化庁文化財部記念物課発行『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編一』(2010) に依拠した。
6. 土層図の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』に準拠した。

目 次

第1章 経過	1
第2章 調査の概要	1
第3章 遺構・遺物	
第1節 中・近世の遺構・遺物	1
第2節 弥生時代～古代の遺構・遺物	2
第4章 総括	2
報告書抄録	

挿図目次

図 1 調査位置図	
図 2 調査区配置図	
図 3 調査区全体図（中・近世）	
図 4 調査区北壁断面図	
図 5 調査区全体図（弥生時代～古代）	
図 6 調査区西壁・東壁・北区南壁断面図	
図 7 SK03・SK04・SK13・SK27・SK28・SK45・SK62・SK67・SE01・SD01・SD02 平・断面図	
図 8 SI01 平・断面図	
図 9 SK33 平・断面図	
図 10 SK68 平・断面図	
図 11 SD03・SD04 断面図	
図 12 出土遺物（1）	
図 13 出土遺物（2）	

写真図版目次

写真図版 1 遺構写真（1）	写真図版 3 遺構写真（3）
写真図版 2 遺構写真（2）	写真図版 4 遺構写真（4）

第1章 経緯

姫路市五軒邸四丁目120番・121番において住宅の建築工事が計画された（図2）。計画地が姫路城域下町跡（県遺跡番号020169）に該当することから、文化財保護法第93条の規定に基づき事業者から令和元年7月2日付で埋蔵文化財発掘届出書が提出された。姫路市教育委員会では8月8日に遺跡の残存状況を把握するため確認調査（調査番号：20190238）を実施した結果、遺構及び遺物を検出した。これを受けて事業者と協議を行い、工事により遺構の破壊を免れることができない240m²を対象に本発掘調査（調査番号：20190544）を実施することになった。10月1日付で事業者と協定を締結し、発掘調査を開始した。調査は現場発生土の仮置場を確保する必要上、北区（東端部を除く）、北区東端部、南区に分割して行った（写真図版1・2）。現地調査に要した期間は、令和2年1月29日から3月18日であった。現地調査終了後、整理作業及び報告書の作成を行い、本書の刊行をもって事業を完了した。本発掘調査の開始から報告書の刊行までの体制は以下のとおりである。

姫路市教育委員会

教育長 松田克彦

教育次長 岡本 宿（令和2年4月1日～）

坂田基秀（～令和2年3月31日）

生涯学習部

部長 横水安洋（令和2年4月1日～）

仲塙宏明（～令和2年3月31日）

文化財課

課長 大谷輝彦（令和2年4月1日～）

花橋和宏（～令和2年3月31日）

課長補佐 大谷輝彦（～令和2年3月31日）

技術主任 関 桂

埋蔵文化財センター

館長 松本 聰（令和2年4月1日～）

前田光明（～令和2年3月31日）

課長補佐 岡崎政俊

森 恒裕（令和2年4月1日～）

係長 森 恒裕（～令和2年3月31日）

技術主任 南 恵和

第2章 調査の概要

城下町絵図等の史料によると調査地は姫路城の外曲輪北東部に該当し、竹ノ門からは約100m西に位置する（図1）。池田氏時代から第1次松平氏時代の17世紀前半までの様相は絵図も無く不明であるが、第1次柳原氏時代（1649～67）以降の調査地周辺は下級武士の屋敷地及び足軽組屋敷であったとされ、調査地は南北に背割りされた複数の屋敷地に跨ると想定される（註1）。

調査は近現代の盛土等を機械で除去した後、遺構を人力で掘削した。記録保存のため、写真撮影及び必要な図化を行った。遺構は基盤層上面で、近世の土坑（SK03・04・12・13・17・26・27・28・34・45・47・62・67等）・井戸（SE01）、中世の溝（SD01・02）、古代以前の堅穴建物跡（SI01）・溝（SD05）、弥生時代中期の土坑（SK33・68）・溝（SD03・04）等を検出した（図3～6）。

第3章 遺構・遺物

第1節 中・近世の遺構・遺物

調査区の形状から全体を検出した遺構は限られる。主要な遺構についてのみ報告する。

SK03（図7） 東西1.10m、南北1.30m、検出面からの深さ0.17m（以下、検出面からの深さとする。）を測る。瓦質土器火鉢（図12-1。以下、図版12・13の遺物番号は通し番号のみ記載。）、丸瓦（2）が出土した。1は底部に刻印を有す。2は凹面に顕著な内叩きをもつ。時期は概ね江戸時代中期以降と思われる。

SK04（図8・写真図版2） 東西1.30m、南北1.45m以上、深さ0.20mを測る。東・西・南の3方が石組で囲まれ、北側は調査区外に延びる。遺物は施釉陶器・染付磁器等が出土したが、細片のため時期は不明である。

SK12（図3） 東西0.72m以上、南北0.90m以上、深さ0.42mを測り、溝状を呈す。柿釉を施した土師器灯明皿（3）、施釉陶器灯明皿（4）が出土した。これらは概ね18世紀以降のものである。

SK13（図7） 径約0.6m、深さ0.05mを測る。基底部で焼土塊を検出した。遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

SK17（図3） 東西2.24m、南北0.78mの長方形を呈し、深さ0.64mを測る。土師器皿（5）と備前焼鉢（6）が出土した。5は手づくね成形で、6は内面に斜め向きの擗目を施す。これらは17世紀前半頃のものである。

SK26（図3） 東西0.64m、南北0.82m、深さ0.43mを測る。土師器皿（7）、施釉陶器刷毛目碗（8）・碗（9）、染付磁器鉢（10）、炮烙（11）、焼締陶器鉢（12）が出土した。7は底部から屈曲し直線的に立ち上がる糸切り皿で17世紀後半から18世紀前半頃、11も同時期のものである。8～10も概ね同時期と思われる。

SK27・SK28・SK45（図7） これらは埋甕遺構である。SK27からは土師質甕（写真図版2-44）のほか施釉陶器碗（13）・土瓶蓋（14）が出土した。44は後述する15と同タイプであるため、実測図化を省略した。SK28からは土師質甕（15）が出土した。SK45からは土師質甕（21）内から染付磁器碗（19）、施釉陶器鉢（20）

が出土した。土師質甕の底径は44が35.0cm、15が30.4cm、21が41.3cmを測る。胎土は雲母を多く含みいすれも酷似する。時期は不明であるが、江戸時代中期以降であろう。

SK34（図3）東西0.60m以上、南北0.90m以上、深さ0.69mを測る。京・信楽系施釉陶器碗（16）、関西系焼締陶器擂鉢（17）、施釉陶器片口鉢（18）が出土した。17は18世紀前半から中頃のものである。16・18も概ね18世紀代のものと思われる。

SK47（図3）東西1.26m、南北1.54m、深さ0.73mを測る。施釉陶器碗（22～24）・鉢（25・26）・徳利（27）、染付磁器碗（28）・皿（29）、土師器壺（30）、土師器灯明具（31）が出土した。28は広東碗で18世紀後半から19世紀代のものである。その他の共伴遺物も概ね同時期のものと思われる。

SK62（図7）径1.20m、深さ0.50mを測る。土師器皿（32・33）が出土した。32は糸切り皿で底部から緩やかに立ち上がる。33は手づくね成形で内彎気味に立ち上がる。ともに17世紀後半から18世紀前半頃とみられる。

SK67（図7）長径1.40m、短径1.14mの楕円形状を呈し、深さ0.37mを測る。染付磁器碗（45）・蓋（46）、施釉陶器筒形碗（47）が出土した。これらについては図化しえなかつたが、45はいわゆる「素書」の染付であり、46・47を含めて18世紀末から19世紀代のものと思われる。

SE01（図7・写真図版2）は石組井戸である。井側内からの径0.60mを測る。工事掘削深度の関係上完掘していないが、井側内から印刷技法による染付磁器が出土したため、近代以降に埋められたとみられる。

SD01・SD02（図3・7・写真図版2）調査区の中央部で検出した。南北方向に延び、その軸線N21～22°Eは飾磨郡の条里地割と一致する。SD01からは16世紀代とみられる土師器壺（34）が出土した。

第2節 弥生時代～古代の遺構・遺物

SI01（図8・写真図版3）は堅穴建物跡である。SD03を切る。規模は東西方向で3.4m、南北方向で1.8m以上を測り、周壁溝を有する。平面形は方形と推測される。高床部は東辺及び北辺の一部に認められ、後者は盛土で構築されていた。主柱穴は検出されなかつた。北東コーナー一部では上面が平滑な石を検出したが、切合い等から本遺構に伴うものが判然としなかつた。遺物は廃絶時の埋土から土師器壺（35）や甕の細片が若干出土した。遺物からは詳しい時期は特定できないが、遺構の切合い及び形状から弥生時代中期（II期）以降と考えられる。

SK33（図9・写真図版3）からは図化に耐えなかつたが、口縁端部に凹線文を施した弥生土器壺や高杯の脚部が出土しており、中期のものとみられる。SK68（図10・写真図版3）からは弥生土器無頭壺（36）・台付鉢（37）・水平口縁を有す高杯（38）が出土した。これらは中期中頃から後半（III～IV期）のものとみられる（註2）。

SD03（図5・11・写真図版4）は調査区を北西から南東に斜行する溝で上幅2.0～2.5m、深さ0.9～1.0mを測る。弥生中期前葉（II期）の甕（39～41）が出土した。SD04（図5・11・写真図版4）は上幅1.3～1.4m、深さ0.6mを測る。弥生中期前葉（II期）の甕（42・43）が出土した。39・42・43にはヘラ描き沈線文が施される。

SD05（図5）からは遺物は出土しなかつたが、他の遺構との切合い及び埋土の様相から古代以前の可能性がある。

第4章 総括

① 土坑等から17世紀前半から19世紀代にわたる遺物が出土した。17世紀前半の外曲輪の様相は絵図等の史料が無いため判然としない。今回の調査では当該期の遺物は出土したが、この段階で城下町として整備されていたかどうかは確定できなかつた。それ以降の時期には複数の武家屋敷地が存在すると想定されたが、この区画に伴うとみられる遺構は検出されなかつた。

② 中世の溝は飾磨郡の条里地割の方位軸と一致するとともに現在の地割の軸線とも一致しており、この付近の城下町の軸線は中世から踏襲されてきたものと考えられる。ただし、中世の遺構・遺物は少なく、集落域から外れていた可能性がある。

③ 弥生時代中期（II～IV期）の溝・土坑及び中期（II期）以降の堅穴建物跡が検出されたため、当該期に集落が存在したことが明らかになつた。

（註1）『姫路市史 第十巻 史料編 近世1』、『姫路市史 第十一巻上 史料編 近世2』、『姫路市史 第十一巻下 資料編 近世3』による。

（註2）弥生土器の編年については、次の文献を参考にした。長友朋子・田中元浩『西播磨地方の土器編年』『弥生土器集成と編年一括磨編一』大手前大学史学研究所 2007年、寺沢薰・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社 1990年、正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 1992年

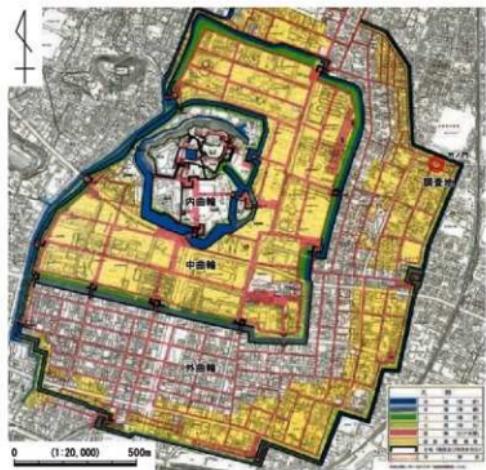


図1 調査位置図

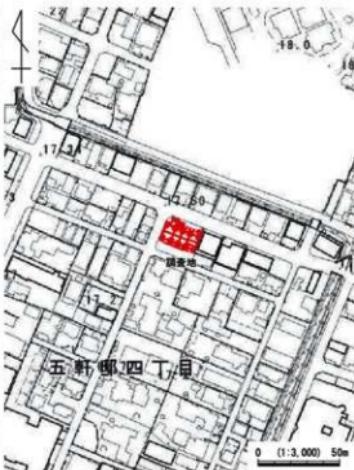


図2 調査区配置図

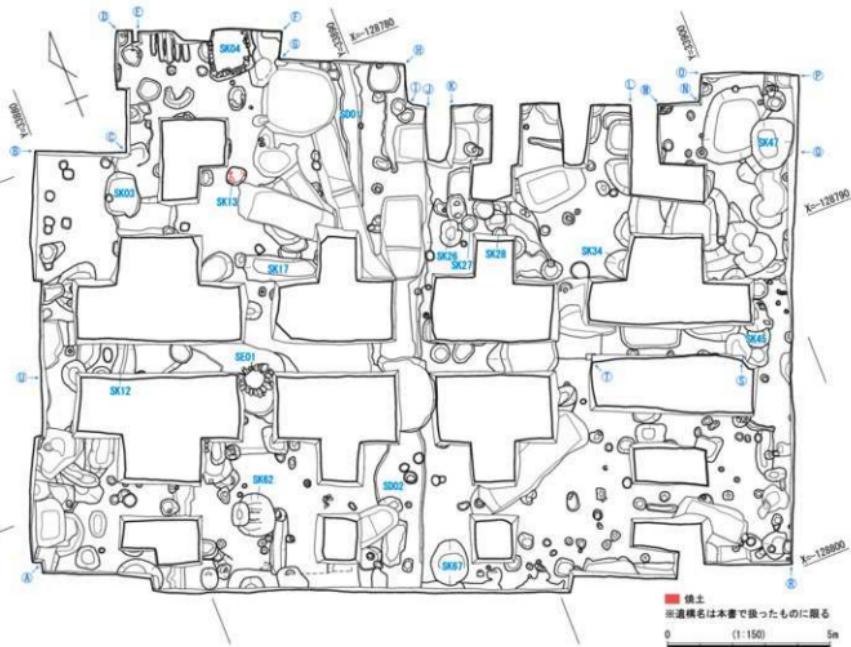
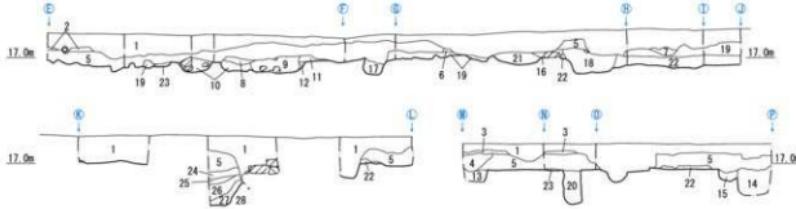


図3 調査区全体図（中・近世）



- 1 近代以降の盛土・埋立・堆積含む。
 2 1098/3 に近い黄褐色砂層砂～細砂 6 層よりなる。
 3 黄褐色砂層砂～細砂 含む。
 4 1098/3 に近い黄褐色砂層砂～細砂 地山ブロック混じる。
 5 1098/2 黄褐色砂層砂～細砂 混合含む。1 層に粗砂。
 6 1098/2 黄褐色砂層砂～細砂
 7 1098/2 に近い黄褐色砂層砂～細砂 灰色ブロック含む。
 8 1098/2 黄褐色砂層砂～細砂 地山ブロック含む。
 9 1098/2 黄褐色砂層砂～細砂 単式大円錐含む。S64 薄熱帯に堆積。
 10 2.59/5 3 黄褐色砂層砂～細砂 5004 基方。
 11 1098/2 黄褐色砂層砂～細砂 地山ブロック夾む。
 12 1098/2 に近い黄褐色砂層砂～細砂 地山ブロック含む。
 13 1098/4 に近い黄褐色砂層砂～細砂 単式大円錐含む。
 14 1098/4 に近い黄褐色砂層砂～細砂 13 層に粗砂。
 15 1098/3 黄褐色砂層砂～細砂 灰色ブロック含む。
 16 1098/2 に近い黄褐色砂層砂～細砂 シルトブロック・腐泥含む。
 17 1098/2 に近い黄褐色砂層砂～細砂 地山ブロック含む。
 18 1098/2 黄褐色砂層砂～細砂 1 層に粗砂。
 19 1098/2 黄褐色砂層砂～細砂 地山ブロック混じる。
 20 2.59/2 黄褐色砂層砂～細砂 地山ブロック含む。
 21 2.59/1 黄褐色砂層砂～細砂 (3001)
 22 2.59/1 黄褐色砂層砂～細砂 城下町駅附近の粗土層か。
 23 1098/6 明治時代粘土土 脱化黑礁
 24 7.59/4/2 黄褐色シルト質細砂 マンガン集塊。(3004)
 25 7.59/4/2 黄褐色シルト質細砂 1 m 大地山ブロック混じる。(3004)
 26 1098/6 黄褐色シルト質細砂 地山ブロック主体。(3004)
 27 7.59/4/2 黄褐色シルト質細砂 桧山ブロック少ない。(3004)
 28 1098/6 明治時代シルト質細砂 (基盤層)

※ E-P は図版 1 に対応
 0 (1:80) 1m

図4 調査区北壁 (E-P間) 断面図



図5 調査区全体図 (弥生時代～古代)

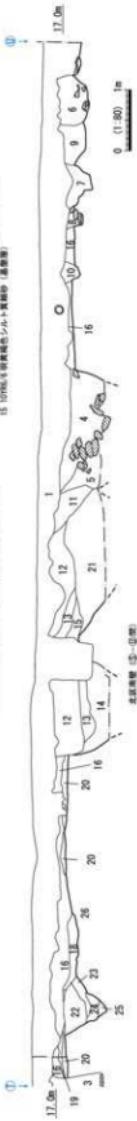
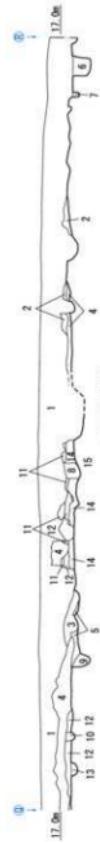


図6 調査区西壁(①-②面)・東壁(③-④面)・北区南壁(⑤-⑥面)断面図

※ ①-②・③-④・⑤-⑥は断面1に付記。

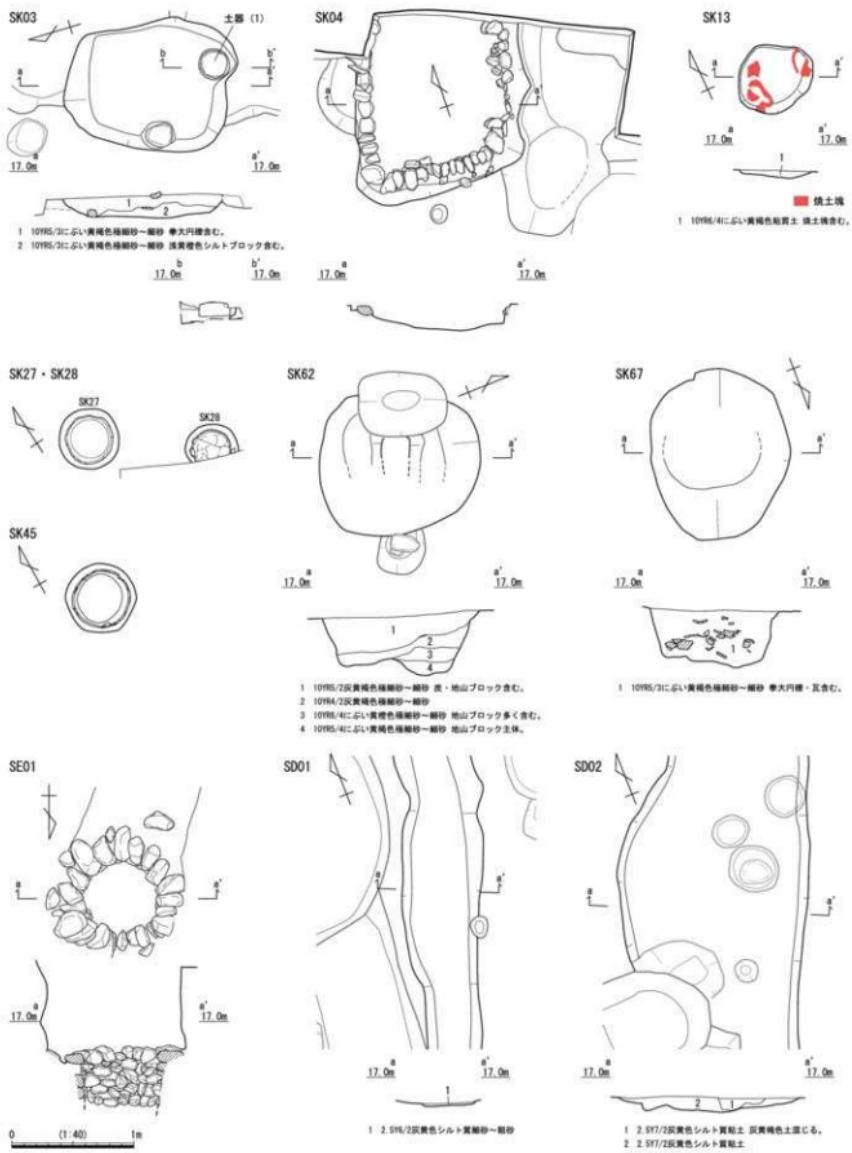
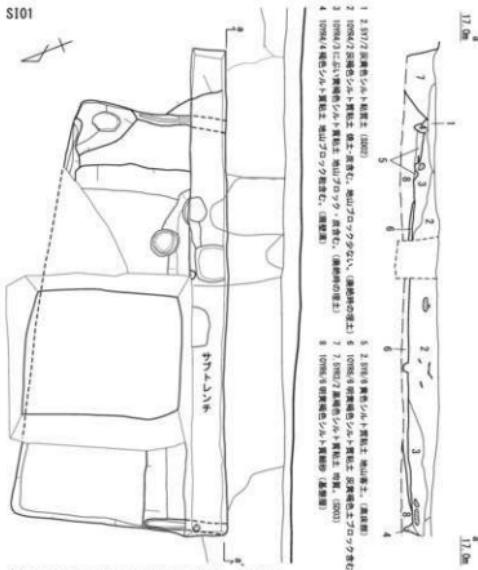


図7 SK03・SK04・SK13・SK27・SK28・SK45・SK62・SK67・SE01・SD01・SD02 平・断面図

SI01



*サブトレンチから調査区南壁までの範囲では、工事掘削深度の関係上、SI01の検出面まで調査が及ばなかった。

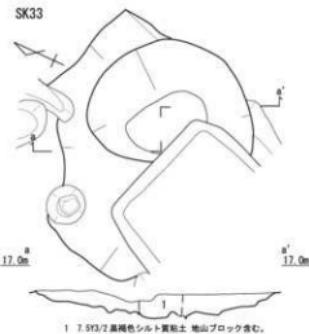
図8 SI01 平・断面図

SD03



図9 SK33 平・断面図

SK33



SK68

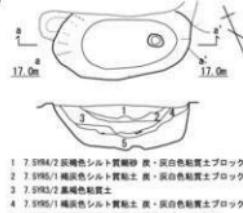
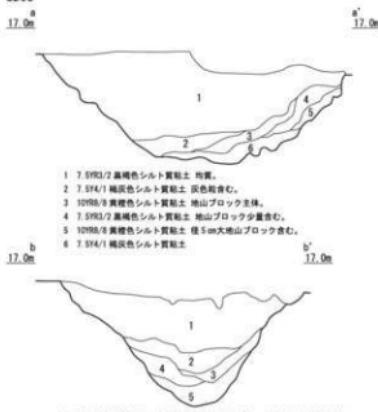


図10 SK68 平・断面図

SD04



1. 7.598/2 黄褐色シルト質粘土 均質。地山ブロックをほとんど含まない。
2. 7.598/3 黄褐色シルト質粘土 上部層に地山ブロックを含む
3. 7.598/3 黄褐色シルト質粘土 従2段の大地山ブロック含む。細緻度じる。
4. 7.595/2 黄褐色シルト質粘土 細緻度じる。従1段の大地山ブロック含む。
5. 7.595/2 黄褐色シルト質粘土 細緻度じる。地山ブロックをほとんど含まない。

図11 SD03・SD04 断面図

※SD03・SD04 のセクションポイントは図版2に対応

0 (1:40) 1m

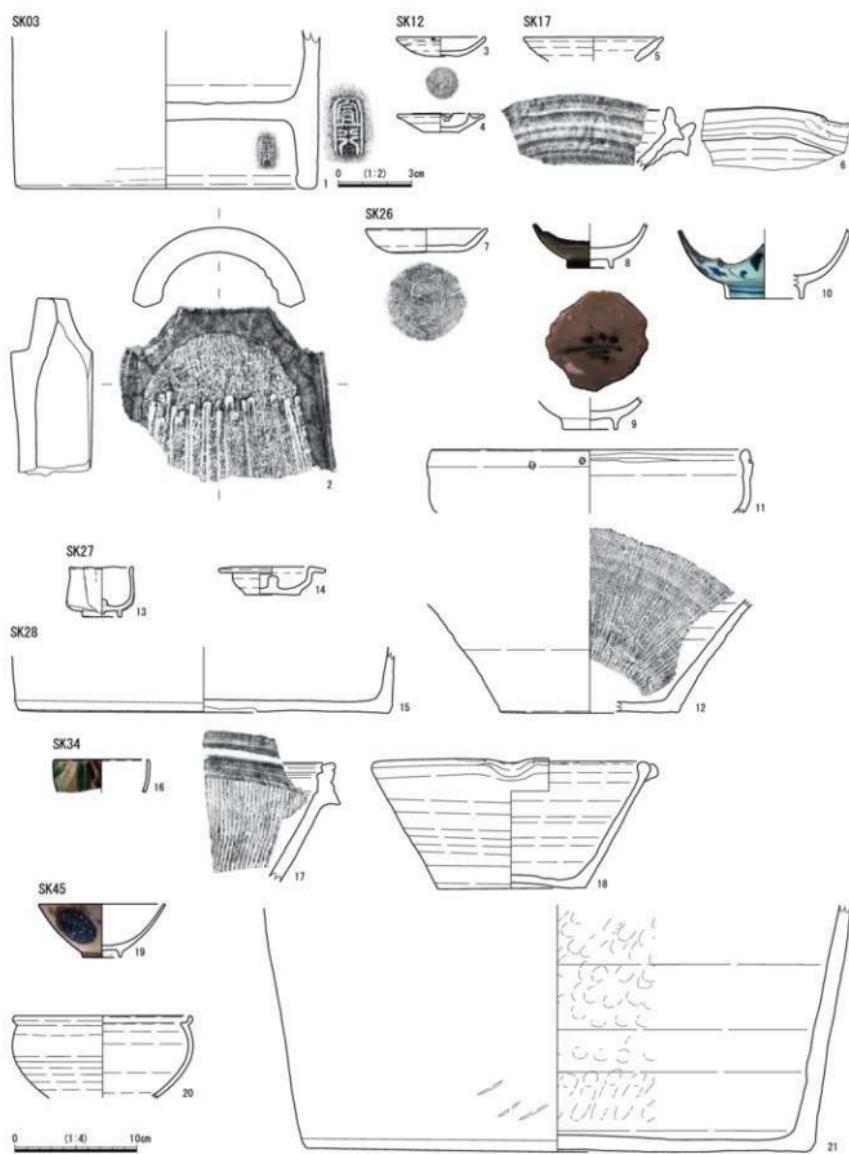


图12 出土遗物 (1)

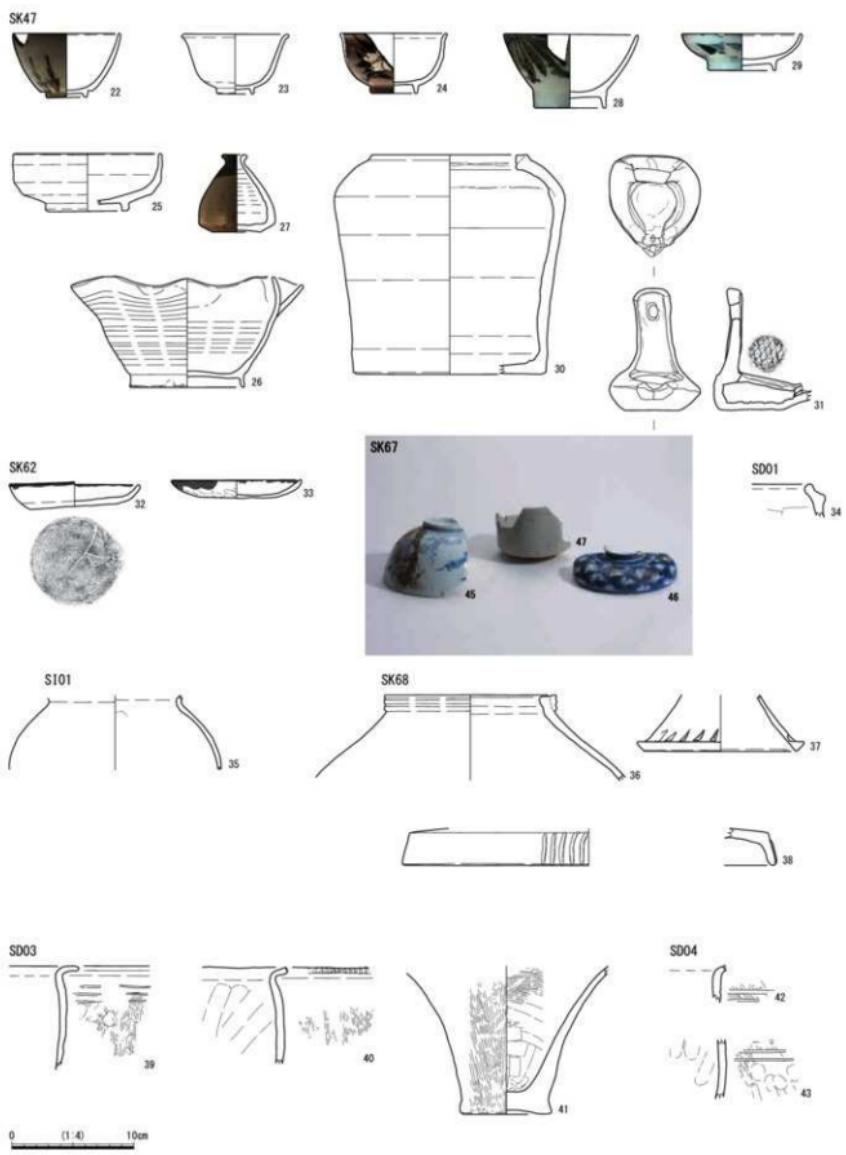


图13 出土遗物 (2)

写真図版 1



北区(東端部を除く)全景(南東から)

透構写真 (1)



南区全景（東から）



北区の東端部全景（南から）



SK04（南から）



SK27土師質甕（44）出土状況（東から）



SE01（北から）



SD01・SD02（北から）

写真図版 3



S101サブトレンチ断面（北西から）



S101周壁溝断面（北から）



SK33断面（南西から）



SK68断面（北から）

遺構写真 (3)



SD03（北西から）



SD04（北から）



SD03断面a-a'（南東から）



SD03断面b-b'（北から）



SD03弥生土器（40）出土状況（東から）



SD04断面b-b'（南から）

報告書抄録

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第112集

姫路城城下町跡

—姫路城跡第431次発掘調査報告書—

令和3年（2021年）3月31日発行

編 集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL (079) 252-3950

発行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本 株式会社ディリー印刷
〒671-0218 兵庫県姫路市飾東町庄57番地2